

を出産している。京極殿は、天皇の里内裏ともなり、藤原道長家による、へまつりごとの中核をなす場であった。長保五年（一〇〇三）五月に行われた左大臣家歌合など、和歌的営みもそのような京極殿の栄花を彩ってきた。道長が、この邸宅において、藤原威子の立后の日に諸官を集めて、祝宴を開き、

この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけ  
たる事も無しと思へば（小右記）

と詠じた歌は、時代を象徴する「晴の歌」ともいべき作品で、諸官は、「優美」な歌として一同で誦したという。晴の場を用意、展開するということは、主人の権力の大きさを誇示し、その栄花を祝し、家やその共同体のアイデンティティを確立するためには欠かせないことであった。

和歌は、晴の場を立ち上げ、機能させる重要な役割を担う。京極殿の南庭は、儀礼空間であり、美的景物を配し、それを愛でるだけでなく、儀礼や舞楽を挙行する場として利用された。

晴の時空間を作り出し、それを展開させるということとは、それ相応の熱量や非日常的感觉を作り出すことでもあるので、特定の作法のもとで慎重に管理・運営する必要

がある。盛儀や祝宴の作法に手抜きや不備があればそれはそれを挙行した権力の失墜につながることもなりかねない。道長一族が、その栄花を極めた邸宅にて、土地神的なもの霊が出現して歌を詠じる。しかも満開の桜を愛でていて、あたかも一族の繁栄を祝しているかのようにも思える。道長は、その権力の絶頂を満月に譬えたが、まるでそれに応ずるかのように本話では、満開の桜が詠じられている。「こぼれてにほふ花さくらかな」は、晴の場において詠まれる性質を内在した歌のようだ。花びらが零れる落ちる間際こそ桜の花が最も咲き誇る瞬間であろうから、その点、完全体である満月と同義である。しかしながら彰子が感じたのは「恐怖」そのものであった。このような説話の背景には、「晴の歌」が持つ、畏怖や忌避のような感覚がまだ存在しているのではないだろうか。

そもそも京極殿の南庭という特殊な場における、えも言えぬほど咲き乱れる真昼間の桜の風景は、自ずと晴の時空間を不用意に出現させてしまう要素をすでに持っている。摂関家の権力を誇示する場である京極殿、そして満開の桜という「晴儀・盛儀」を催すには最適の環境が整っていた。しか

しながら実際にはその場を言祝ぐものには用意されておらず、酒宴や芸能、また宴を構成する華やいだ装束をした臣下やその詠歌も存在していない中で、本件は唐突に起こった出来事であった。京極殿の満開の桜の場、そこで「極じく気高く神さびたる音」にて和歌が朗詠されることで、晴の場が、人の知らないところで勝手に立ち上がり、出現した。ここにも「恐怖」の本質がある。それは聖なる時空間と日常のバランスや均衡が失われたことを意味していた。家の繁栄を言祝ぎ、祝福する力を持つ晴の歌はその特殊な性質ゆえに、その扱い方次第では、逆に災いをもたらしてしまうという畏れを生むのであろう。

南庭という儀礼空間、そして、そこで、もてなした客人を迎え入れる場でもある日隠しの間に、彰子が近づかなくなったとは実際には考えられないことであるが、そのようなことが語られるというのは、藤原氏が、晴の場を演出することを意味し、それは摂関家の栄花の衰えをイメージさせるわけであるから時代の転換点を考えるうえでは実に興味深い話でもあった。